



## 実と剛「次男の選択」(5)終

後ろ姿が見られている

彫刻家・富樫実が、7歳年下で弟のように応援していた柏戸(富樫剛)の大関昇進を祝った作品がある。

昭和35(1960)年秋に贈った木彫りのレリーフだ。長い髪を後ろに垂らし、丸みを帯びた体形だけに、第一印象では大柄な女性のように見える。

だが腿の辺りのたくましさや大きな足形を考えると、男性なのだろう。洗髪した力士がマゲを結う前の姿とすれば合点がいく。

風呂上がりで一番無防備な状態ではあるが、深い赤紫色の周りには何も無い。

人間の孤独感も伝わってくるような構図だ。

「自分の後ろ姿は、どんな時も自らは見えない。だが他人からは常に見られている。しっかりと、自分を保



大関昇進時、柏戸に贈った木彫りのレリーフ。額裏には「富樫実 刀」の銘

若さで平成8(1996)年亡くなったことに関して「若い時はいっぱい食べて飲む姿を見てきた。楽しかったなあ。それでも内臓は丈夫だったし、何より体が頑丈だった。それが後々父になったのかもしれない」と悼んだ。横綱昇進後、糖尿病を発症し、インスリンを打ちながら土俵を務めた姿も知っている。

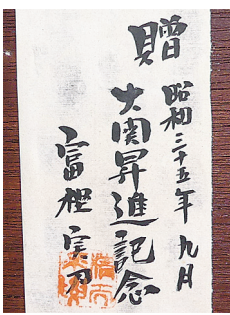
### 58歳での死去を悼む

角界入門後、関西圏で唯一頼れる親族として剛を見守ってきた実だが、58歳の

若さで平成8(1996)年亡くなったことに関して「若い時はいっぱい食べて飲む姿を見てきた。楽しかったなあ。それでも内臓は丈夫だったし、何より体が頑丈だった。それが後々父になったのかもしれない」と悼んだ。横綱昇進後、糖尿病を発症し、インスリンを打ちながら土俵を務めた姿も知っている。

### オジ同士の深い絆

庄内弁では男ぎょうだいの次男以下を「オジ」という言い方をする。互いに当主の次男にあたり、実と剛はオジ同士として、将来を励まし合った。望郷の念はあってもオメオメとすぐ帰郷するわけにはいかない面



大関昇進記念 富樫実 刀



横綱柏戸記念館

も似通っていた。農家を継いだ長兄を尊重し、ねざらう気持ちもあった。

実は京都市立美術大(現京都市立芸術大)を卒業後、岡を超えて函館などからも

柏戸が亡くなって8年後の2004年完成した「柏戸記念館」の土俵型ミニメント  
勢を貰った。  
「故郷の風景に「俺に会いたかったら庄内に来い。俺は作品として庄内で生きている」と言い残している。敬称略、この項終わり」  
(富樫 嘉美)

### 故郷への思いを解放

そうした中、山形市の建設会社と作品を通じて縁が生まれ、県職員育成センター内の壁のレリーフを手掛けた。さらに鶴岡市関係者との交友が生まれ、故郷から作品の依頼を受けることになった。「私にとってミラクルという事態だった」と言い、故郷へ抑えていた気持ちがあえて一気に解放

「故郷とは刀折れ、矢尽きた時に訪ねる場所。命乞いをする場所。振り向くどころか横目を使っても駄目だ。簡単に戻るわけにはいかないという気持ちが強かった」とあえて戻らない姿

「空にかける階段」の英訳は「Stairway in the void」。voidは「虚空」を表し、skyの「空」とは意味合いが違う。「色即是空」などに使われる何も無い空間を表している。  
実は亡くなる前、一人娘に「俺に会いたかったら庄内に来い。俺は作品として庄内で生きている」と言い残している。敬称略、この項終わり」  
(富樫 嘉美)

◆富樫 実(とがし・みのる) 昭和6(1931)年1月2日生まれ。旧櫛引町出身。庄内農学校(現庄内農業高)卒業後、岩手県一関で仏師修業。帰郷後山添高(現鶴岡南高山添校)に14カ月間編入、その後京都市立美術大に進んだ。鶴岡市名誉市民。昨年11月25日、89歳で亡くなった。

毎週火曜日付に掲載